

2019年度  
関西学院大学ロースクール  
B日程

一般入試（法学未修者）  
特別入試（法学未修者）

論文問題

《10:00～11:30》

○開始の指示があるまで内容を見てはいけません。

## 【論文問題】

次の問題文を読んで、「設問1」と「設問2」に答えなさい。

〔設問1〕

筆者が考える正しい「知識についての認識」（エピステモロジー）について、対照的な考え方と対比させつつ、約300字で説明しなさい。その際、自らの書いた説明文中の重要と思われるキーワードに下線を引くこと。

〔設問2〕

(1) 下線部②の批判的思考の定義を行いなさい。(約80字)

(2) 今後、法科大学院で(1)で定義した批判的思考力を培うためのあなたの学習の方法論を述べなさい。但し、下線部①の島九段の学習方法に学ぶべき点に触れること。(500字程度)

## 問題文

知識は客観的なものであり、「事実」であると考えている人が多いと思う。例えば、「歩く」は英語では「walk」という動詞に訳すことができるという事実。天動説は誤りで地動説が正しいという事実。ニュートンが物体の運動に関する三つの法則（慣性の法則、運動方程式、作用・反作用の法則）を発見したという事実。フランス革命は、一八世紀後半、ヨーロッパに啓蒙思想が広がる中、絶対君主支配（アンシャン・レジーム）に批判が高まる時代背景のもと、市民の暴動に端を発して広がったという歴史上の事実。これらの「事実」が知識であり、それをたくさん覚えることが大事であるという認識が、現在多くの人に共有されている「知識についての認識」（エピステモロジー）であろう。

学びは受験のためではなく、大事なのは判断力、思考力だと主張する人でも、このエピステモロジーを持っている人はじつは多い。第3章で、人は多くのことで素朴に自分が培った思い込みを持つと述べたが、「知識＝事実」というエピステモロジーは、多くの人にとって非常に根強い思い込みの一つである。

どうしてこの思い込みが根強いのか？ほんとうのところはわからないが、テスト文化の影響は否定できないだろう。どれだけ多くの「事実」を知っているかを問うことがテストでもっとも扱いやすいため、「事実」を覚え、それをテストで思い出して書き出す、ということを小さいころから習慣的にやってきたためかもしれない。私たち日本人は「覚えた事実の量」を評価されるというテストを小さいころからずっと受け続けている。こうした文化をもたない人々のエピステモロジーは、おそらく私たちとは大きく異なっているのだと思う。

いろいろな人と知識について話をし、「知識＝事実」のエピステモロジーを聞くたびに私が思い浮かべてしまうのは、ドネルケバブである（図6-1）。ドネルケバブは肉片を集成してつくる巨大な竹輪のようなもので、トルコの伝統的な料理だ。



図6-1 ドネルケバブ。gato/PIXTA

知識はきれいに切り取ることができる断片である「客観的事実」として存在し、その断片を人から教えてもらう。「知識＝事実」のエピステモロジーでの知識モデルは、「客観的な事実」である知識片をぺたぺた表面に貼り付けていって、ひたすら大きくしていくイメージを喚起させる。そこで私はこれを「知識ドネルケバブ・モデル」と呼んでいる。「知識＝事実」のエピステモロジー、それを根とする知識習得についての「ドネルケ

バブ・モデル」(ぺたぺた貼り付けモデル)がなぜ「生きた知識」に結び付かないのかを、これから述べていこう。

母国語は、様々な知識の中でも「使うための知識」、つまり「生きた知識」の代表である。言語を使えるようになるために、子どもは何をどのように学んでいるのかをここであらためて振り返りたい。

そもそも言語は、断片的な知識をぺたぺた貼り付けていき、ボディをどんどん大きくしていけば使えるようになるわけではない。音韻の規則、文法、分厚い辞書にリストしてある単語の意味をすべて「暗記」しても使えるようにはならない。第2章でも述べたが、子どもはぺたぺた知識を貼り付けて母国語を使えるようになっていくわけではないのだ。

言語はあまたの要素が互いに意味をもって関係づけられてつくられたシステムである。語彙の学習を例に挙げれば、単語を覚えるということは、ドネルケバブの肉片を貼り付けるように、それまでの時点で作られている語彙にさらに新しい単語を加えていくことではないのだ。新しい単語を語彙に入れるために、子どもはその単語の意味を自分で考える。そのときには、すでに知っている単語との関係を考え、語彙のシステムの中での新しい単語の収まる場所を考える。新しい単語が語彙に入れられたら、その単語と関係する単語の意味も変わりうるし、語彙のシステム自体も変動する。

これは言語に限らず、どのような分野の知識にも言えることである。最も役に立つ「生きた知識」とは、知識の断片的な要素がぺたぺた塗り重ねられて膨張していくものではない。常にダイナミックに変動していくシステムなのである。このシステムは、要素が加わることによって絶え間なく編み直され、変化していく「生き物」のような存在なのだ。

では逆に、断片をぺたぺた貼りつけるだけの知識とはどのようなものだろうか？このモデルに近いのは、使うことができない外国語の知識だろう。私自身、中学や高校のときにはテストのために英単語の意味を日本語に置き換えて一生懸命覚えたものだ。例えば、「break=壊す」「deep=深い」「hard=固い」のような具合に。しかし、このように覚えた対応する訳語は「意味」と言えないものだったし、この知識で英語の文章をつくることはできなかった。「break」という単語が実際にどのように使われる単語なのかを知らなければ、単に「break=壊す」とだけ覚えても文はつukれない。

「break」と「壊す」とでは、動作の対象になる名詞(モノ)が違う。つまり、意味が同じではないのだ。

ほんとうに「break」の意味を理解するためには、「break」と意味が似た別の動詞(「rip」「tear」「smash」「crash」「bend」など)と「break」の意味がどのよう

に違うのかも知らなければならない。ところが、「外国語の単語＝日本語の単語」というドネルケバブ・モデルをもっている学習者は、「break＝壊す」と覚えるだけで安心してしまう。「break」という単語が文脈によって意味が変わっても注意を向けないし、関連語との関係を考えることもしない。結局、「break」の意味はずっと「壊す」のままで、「rip」「tear」「smash」「crash」「bend」などとの関連付けもされないまま、単に「壊す」という訳でラベル付けされただけの英単語として放置される。そして、本来はことばの「意味」とはいえない、日本語に置き換えられただけの英単語がぺたぺた「英単語ドネルケバブ」に新たに貼り付けられていく。そのボリュームはどんどん大きくなっていくが、結局、英語は使えないままなのだ。

子どもは音韻の規則、文法の規則、単語の意味など、言語という大きなシステムを構成する要素をほとんどすべて自分で見つける。言い換えれば、子どもはドネルケバブの肉片のようにすでに切り取られた知識片を「はい」と渡されて、それを暗記しているのではない。切り分けられていない知識の塊をどのように切り出していくかを自分で見つけなければならない。言語を使うために子どもは「外にある知識を教えてもらう」のではなく「自分で探す」。要素を見つけながら、要素どうしを関連づけ、システム自体も発見していく。自分で見つけるから、すぐに使うことができるのである。

例えば、乳児は自分の母国語の単語の音の最小単位となる音素を発見する。しかし、日本語を母国語とする赤ちゃんと言語を母国語とする赤ちゃんでは、発見する音素が違う。前にも述べたように音素というのは、「客観的に存在する音」ではなく、「発見され、解釈される音のカテゴリー」なのである。英語、ネイティブ話者が発音した「race」と「lace」は一歳以上の英語母国語の赤ちゃんには「違う音を要素にもつ違う音の単語」として聴こえるし、日本語の環境で育つ赤ちゃんには「同じ音の要素をもつ同じ音の単語」として聴こえるのだ。これはとりもなおさず知識は「客観的な事実」ではないことを意味する。

(中略)

「生きた知識」は目の前の問題を解決するのに使うことができるだけではない。新たな知識を創造するために使うことができる。新たな知識はゼロからは生まれない。すでに知っている知識を様々に組み合わせることで生まれる。創造力の源泉は持っている知識を使って想像することである。熟達者の向上の源泉も想像力だ。第4章で述べたように熟達者は、いまはできなくても、自分が目指そうとするパフォーマンス、あるいは自分が得たいと思っている知識の姿を想像することができる。人は、想像力といま持っている知識とを組み合わせることによって、無限に新しい知識をつくって

いくことができる。それに対して、ドネルケバブ肉片をぺたぺた貼り付けるように覚えただけの知識は、使うことができない。使えないから、他の知識と組み合わせられて新しい知識を生むこともないのである。

しかし、暗記した知識も役に立つ、自分は丸暗記で知識を得た、という反論も出てきそう。昔、武家の子どもは素読によって四書五経を頭から丸暗記したという。プロ棋士は頭の中に膨大な棋譜のデータベースを持っている。では、棋譜を暗記するとき、どのようにするのか。将棋に強くなるためには、とにかく膨大な棋譜を覚えなければならない。それは、テストのために単語や公式を暗記するのと同じなのだろうか。プロ棋士の<sup>しまあきら</sup>島朗九段の著書にこういう一節がある。

①厳選した指定図書の中からはまず1冊、1局ずつ勝った側から並べ、次に負けた側から並べる。そして暗記して棋譜に書き出し、何も見ずに並べて1局が終了する。都合4回ほど同じ将棋を言葉の本当の意味の通り、精密に調べる方法だ。……

島朗『島研ノート 心の鍛え方』（講談社）より（傍点筆者）

（中略）

子どもは、母国語を学びはじめるや否や、母国語の音、語彙、文法などについて、個別の要素を学習していくだけではなく、それらを学習するためのスキーマをつくっていく。生後数カ月の乳児が自分を取り囲む世界にあるモノや出来事についても、すでに「何が起こるべきか」あるいは「何は起こるはずがないか」についてもスキーマを持ち、予測をしながら世界を観察している。

これまで何度も述べてきたように、これらの「思い込み」のスキーマはいつも正しいわけではない。間違える可能性もあるけれど、よい解決をもたらす確率が高い、というような性質のものだ。人間は乳児の時からこのような「思い込み」をどんどん自分でつくっていく。そして、この「思い込み」を使って次に起こることを予測したり、新しい要素の学習をしている。

間違いを犯す危険があっても「思い込み」を使って思考してしまうのは、未完成であれ、知識のシステムの枠組みをとにかくつくるためだ。第2章で述べたように、ある程度の数の要素が集まると、子どもは要素の間の関係や新しい要素を学習するためのパターンを探す。これはとりもなおさず、子どもが知識を最初から断片的な要素の集まりではなく、システムであることを見抜いて、システム構築に向けてすぐに動き出していることを示している。

システムをつくっていくためには、システムの外枠ができていることが大事だ。い

ったんシステムの外枠ができれば、新しい要素は最初からシステムの中にすでに存在している要素と関係づけられながら学習されることになる。このようにして知識は、互いに関係づけられない断片がドネルケバブのようにどんどん貼り付けられるのではなく、要素が互いに関係づけられる形で、構造を持ちながらシステムとして成長していくのである。

「思い込み」に導かれた思考のしかたは、誤った思い込みを生む危険性もある。それでもなお、そのような思考のしかたで素早く知識システムを立ち上げようとするのは、誤りは後から修正すればよいことも子どもは知っているからだ。

効率よい学びは確かに大事だ。しかし、それはシステムの枠組みを素早く立ち上げ、後でゆっくり修正するという学びの過程の一部でしかない。効率よい学び自体が、熟達者のすぐれたパフォーマンスを可能にするわけではないのである。

(中略)

エピステモロジーは、思考力、学習力と深い関係がある。ドネルケバブ・モデルの知識観と、知識を常に再編成を繰り返すダイナミックなシステムとして捉える知識観とでは、目指す思考のありかたも、理想とする学びのあり方もまったく異なる。エピステモロジーには発達的な段階がある。そして、それぞれの段階の知識観は、知識獲得、つまり学習と密接につながっている。コロンビア大学教授のディアナ・キューンによれば、エピステモロジーは「絶対主義」→「相対主義」→「評価主義」という三つの発達段階をたどるとしている。

小学生の多くは、知識は人によって解釈され、構築されるものであることを理解していない。彼らは科学者によって発見された知識が絶対的に正しい事実であると思っているし、科学者の仕事は「世界に存在する客観的事実を集めてくる」ことであると思っている。言い換えれば、知識は常に絶対的に正しい・正しくない、と二色に分けることができ、「正しい知識」はドネルケバブの肉片のように切り取られた形で世界に存在するものと考えているわけだ。

もう少し発達が進むと、知識は解釈されるものである、ということはわかってくる。ただし、「自分は自分、人は人」というスタンスをとり、データの多様な解釈、多様な仮説、多様な理論は、それらが互いに対立するものであっても、どれでもOKだと考えてしまう。つまり、仮説や理論は様々な方面から検討・吟味・評価された上で最も論理的に一貫し、頑強なものが選ばなければならない、ということを理解していない。この段階のエピステモロジーを持つ人は、知識が構築されること、したがって絶対的でないことは知っている。しかし、知識がどのように構築されるかを理解していないので、どれもが正しい、という相対主義に陥ってしまっているのである。

次のもっとも高い水準の発達段階になると、知識は単なる「考え」とは違うことを理解するようになる。とくに科学的知識とは、

- ・ 証拠によって実証されるべきものである。
- ・ そのためにはモデルを構築し、実験によって具体的に吟味可能な仮説を立て、実験からの証拠に照らして評価されなければならない。
- ・ 仮説は多くの場合、複数あり、それらの仮説のうち、どれが最もすぐれたものであるかを、証拠に照らして評価する必要がある。

ということを理解するようになる。

科学を学習する目的は、科学者によって発見された「事実」を覚えることではない。今日覚えた（その時には「真実」と思っていた）事実や理論が、一〇年後には棄却されているかもしれない。

科学はデータをもとに論理を組み立て、理論を構築するプロセスである。では、「科学を実践する」ために、子どもは何を学ばなければならないのだろうか？学校で、理科の時間などで実験をし、データをとり、分析する、という学習はしているだろう。しかし、それらは「科学を行う」ための要素に過ぎない。科学的思考ができるようになるために必要なのは、むしろ、理論の検討のしかた、仮説の立て方、仮説の検討のための実験のデザインのしかた、データの解釈の仕方、結論の導き出し方、などの論理を組み立てるスキルなのである。

もちろん、ここでいう「科学」は自然科学に限らない。心理学はもちろんのこと経済学、法学、社会学のような社会科学も同じだ。さらに敷衍すれば、どのようなことであれ、単なる好き嫌いではなく、理にかなった意思決定をするために、（単なる「論理スキル」ではなく）前項の論理構築スキルに則った思考が必要である。

いま、いたる所で「批判的思考」ということばを聞く。しかし、批判的思考の定義に関して、ほとんどの人はあやふやな考えしか持っていないようだ。さきほど述べたエピステモロジーの発達段階を提唱したディアナ・キューンは、「批判的思考」は「argue」する能力だという。

「批判的思考」はもともと英語の「critical thinking」の訳である。そして、このことばと必ずペアになって使われる概念が「argue」という動詞なのである。

これらの言葉はどちらも翻訳がとても難しい概念で、実際、多くの日本人はどちらのことばも誤解して捉えていると思う。ある英和辞典では「argue」は「論じる、論議する、論争する」が第一の語釈になっていて、第二の語釈として「口論する、言い争う」がある。この語釈のために、「argue」という語によいイメージを持つ日本人は少ない。しかし、これらの語釈は「argue」という言葉の本質をまったく表していない。



英英辞典の方がこれらのことばのものと近い語義を与えている。例えば、オックスフォード学習者英英辞典では、「Give reasons or cite evidence in support of an idea.」とある。ここで出てくる「evidence」という言葉が非常に大事なキーワードである。「argue」とは、ある考えがあつたら、その正当性を打ち立てるために「evidence」（証拠）を積み上げて論理をつくっていくという意味なのである。

余談であるが、「evidence」もまた、なかなか日本人には理解が難しい単語である。日本語では「証拠が三点ある」と言えるので、日本人はつい「three evidences」「many evidences」と言ってしまうが、「evidence」は不可算名詞なのでこれは誤りであり、「three pieces of evidence」「ample evidence」などと言わなければならない。「evidence」が不可算名詞であることは英語のエピステモロジーを反映しているのだと思う。「evidence」という語は個別の「事実」ではなく、「さまざまなピースを論理的に整合性がとれるように組み立て、構成した論理の不可分な全体」を指すのである。

話を戻すと、②批判的思考とはつまり、（中略）を言う。単に「感情にとらわれず客観的にものごとを考える」とか「多角的に物事を検討する」ということではないのだ。

このような科学的思考、批判的思考のバックボーンになっている仮説検証のプロセスと理論構築のプロセスはもちろん、本で読んだだけ、あるいは誰かに説明されただけでは理解できない。知識（理論）を構築していく実際の道筋がわからないと、様々な仮説を適当に立てるだけで終わってしまう。自分で仮説を考え、実験をデザインし、データを取って分析し、吟味し、論を構築し、それを評価する。「批判的思考」はこのようなプロセスを何度も繰り返し経験すること、つまり、「体で覚える」ことによって初めて体得できるのである。

批判的思考（科学的思考）とエピステモロジーとは互いを支え合い、互いを引っ張り上げながらともに発達する。知識ドネルケバブ・モデルのエピステモロジーを持っていたら、批判的思考は習得できないのは改めて言うまでもないことだ。だから、思考力を養うためにはエピステモロジーを発達させ、成熟したエピステモロジー、つまり評価・構築主義のエピステモロジーを持たなければならないのである。

（以下略）

今井むつみ『学びとは何か——〈探究人〉になるために』（岩波書店、2016年）より抜粋。なお、本文中の小見出しは省略し、下線部①\_\_\_\_\_や②\_\_\_\_\_など、出題に必要な限りで本文に手を加えている。

## B 日程 論文： 出題趣旨・講評

最近「知識」シリーズが続き、問題の予想がしやすくなるかもしれないが、学習方法論に興味・関心を受験生が持ってくればそれはかえって好ましいことだと思う。

1 番は、対比する重要概念を理解したうえで、筆者の知識観における重要な要素（動的、システム、関連性、主体性などのキーワード）を抜き出せるか（要件的思考）を試すものである。

2 番は、定義をもとに、むしろその具体的文脈におけるあてはめを問うとともに、それを自分の考えの文脈で応用できるかを試すものである。

3 番も考えていたが、早期卒業生もいることを考えると、時間内に手早く処理をさせるよりも、きちんとした文章をかけるかを試したいので、2 問とした。

1 筆者が考える正しい「知識についての認識」（エピステモロジー）について、対照的な考え方と対比させつつ、簡潔に説明しなさい。その際、重要と思われるキーワードに下線を引くこと（300字）。

代表的な知識観として、知識は事実であり、事実をたくさん覚えることが大事であるという知識観がある。筆者はそれを知識のドネルケバブ・モデルと述べている。これは肉片を断片的に重ねたように、知識同士が有機的な関わり合いを持たない丸暗記型で、生きた知識として活用できない。

それに対置されるのが、動的なシステムとしての知識である。知識同士が互いに意味をもって関連づけられていき、想像力をもってその関連性を自分で主体的に探し、新たな知識の関連性やシステムそのものを発見する。このダイナミズムを生み出すのが生きた知識の体系なのである。

2 最初に下線部②の批判的思考の定義を行ったうえで、次に、下線部①の島朗九段の棋譜を暗記する方法がどのような意味で「批判的思考」に基づいているのかを、下線部①の記述にできるだけそって説明しなさい。最後に、今後、法科大学院でさまざまな判決文を読んでいくにあたって、島九段の学習法をどう生かせばよいか、あなたの方法論を簡潔に述べなさい（700字）。

批判的思考とは、仮説の正しさあるいは誤りを、証拠に基づいて論理的に積み重ねて構築していく思考のしかたを言う。

島九段が棋譜を暗記するとき、まず1局ずつ勝った側から棋譜を並べる。これは勝った側に自分を置いてみて、勝った側の思考プロセスを想像しながら、勝った側が勝てると考えた仮説を実際の勝負の流れの中で検証していく作業である。次に負けた側から同じ作業をすることで、違う立場で違う仮説を検証していく作業を行う。それぞれの勝利に向けた論理的思考を理解することで、棋譜を「こう考えたはずだ」という手筋で覚えることができるから、暗記して棋譜に書きだすことができ、その後何も見ずに1局並べることができる。それを4度繰り返すことで、あるべき手筋を記憶に定着させるとともに、それぞれの立場の論理的思考を自分のものにしていき、そこからさらに自分独自のよりよい手筋の論理構築の力をつけていっているのである。

法律の勉強においても、知識の暗記だけでは生きた知識とならない。判決文は、原告と被告、あるいは被告人の弁護人と検察官とのやりとりの積み重ねの上に立って裁判官が判断を下した文章である。

そうだとすれば、判決文についても、島九段が述べるように、それぞれの立場からの論理の構築をまずその立場に立って後追いし、それぞれの論理を理解したうえで、実際の判決の結論に照らして各言い分の正しさを検証していく作業が必要になるだろう。あるいは逆に裁判官の論理を当事者の論理から批判的に検証することも必要だろう。

復習にしても、問題意識なく繰り返して内容を覚えるのではなく、論理にそって理解したうえで、要約を書き出し、書きだした後にはそれを参照せずに頭だけで想起することで理解を確認する、といった方法論を実践していきたい。